

早稲田大学 スポーツ科学部 古文 講評

〔総合分析〕

出題形式	マーク式
試験時間	90分（現代文2問、古文1問）
解題	<p>成立年代未詳。筆者堀景山が、藩の重役岡本貞喬から質問状を寄せられ、それに答える書簡という形式を借りて、君主たる者の心構えを論じた書。なお、設問の前文にもあるように、景山は本居宣長の漢学の師であるが、本書は宣長の思想形成に決定的な影響を与えたとされている。引用の箇所は、詩によって人情の酸いも甘いも知ることができるとい詩経の教えを説く。</p> <p>堀景山（ほり・けいざん）江戸時代中期の儒学者。安芸広島藩に仕える。元禄元年（1688）生まれ、宝暦七年（1757）九月十九日、京都にて没、七十歳。</p>

〔大問別講評〕

番号	出典	コメント	難易度
(三)	堀景山著『不尽言（ふじんげん）』（一部・省略された部分がある）随筆	<p>問十五＜傍線部訳＞</p> <p>傍線部三か所の解釈を選択させる出題形式は昨年を踏襲。三か所共に単語レベルの知識で選択するものではないが、選択のポイントを判断できれば、正解は容易であろう。Aは確定条件、Fは傍線部の前と並立の関係、Hは「さしつかへこまる」の解釈から考えるとよい。Aは易、F・Hは標準。</p> <p>問十六＜空欄補入＞</p> <p>名詞を補い入れる頻出する設問形式。昨年も出題。選択肢の口の帰服の意が些か難しいかも知れないが、空欄の上の「人のまことに」を受ける述語として成り立つかを判断し、消去してゆけば正解を得られよう。なお、「帰服」の意は「心を寄せ従うこと」。</p> <p>問十七＜漢文・返点＞</p> <p>これも昨年の出題形式に従う、返点を付す設問。「不能」は常套の句形、下から返って「一あたはず」と訓む。昨年の法学部にもこれに関わる設問が課された。基本問題と言えよう。傍線部の訓読は「四方に使ひせんに、専り対する能はず。多しと雖もまた奚を以てせん。」</p> <p>問十八＜文学史＞</p> <p>中国古典の文学史。漢文の知識としては基本。平易。『史記』は司馬遷が書いた編年体の歴史書。</p>	標準

		<p>問十九<文法> 選択肢の記述形式も昨年に倣う設問。特にひねりもない基本問題。易。</p> <p>問二十<文法> 音便形の数进行問。含まれる音便形は「闊う」「出逢う」の二か所、共にウ音便。</p> <p>問二十一<敬意の対象> 敬意の対象进行問典型的な設問ではあるが、本文の全体を把握できる読解力が必要。本文の後半三分の二は『論語』の解釈である。</p> <p>問二十二<内容一致> 選択肢の表現が本文の表現のままとなっていないので、本文との対応箇所を見付け出すより、本文に記述ない内容を含む選択肢を消去する方が効果的にして正確である。</p>	
--	--	--	--

〔総合コメント〕

新設された昨年の出題が 530 字弱であったことに比べ、本年は 800 字弱と些か本文は長くなったものの、早大の他学部からは短めの文章と言える。設問数は昨年と同一、出題形式は解釈、文法、内容一致、空欄補入、また漢文を含んだ文章で漢文についての設問を有する点は去年を踏襲しており、去年なかった敬語の設問も含め全体として大学入試の基本的な設問形式である。設問のレベルも決して難解のものを含むものではないが、知識を問う基本レベルの設問から、本文全体の精確な読解と判断力・思考力を問うレベルまでが課された。

また、本文は、高等学校で扱うことのない文章ではあるが、『新日本古典文学大系・99』（岩波書店・2000 年 3 月出版）に収められ、世に弘められている。昨年の第二文学部の出典となった『泊泊筆話』も同大系に収められたものであった。